

臨床・障害 2 (809~817)

座長 長島瑞穂・鈴木陽子

- 809 自閉症児の記憶過程の検討(2)
——系列位置効果と多音節刺激・多項目刺激の比較による——

前橋育英学園短大 山根 律子

- 810 自閉的傾向児の発達(1)
京都府立大学 長島 瑞穂

- 811 自閉症児の抽象能力に関する検討
——色・形次元の抽出について——

筑波大学 近藤 明子

- 812 無発語自閉症児の言語訓練に関する一考察
——発声・発語の困難な症例——

茨城県立コロニー 打越 実

- 813 —MBD児の平仮名文字言語信号系活動の形成
——(3)印字作業状況における発信活動の促進——

- 814 ——(4)書字発信活動の促進の試み——

お茶の水女子大学 ①千田 孝子

国立特殊教育総合研究所 ②土谷 良巳

- 815 微細脳損傷 (MBD) といわれた子を育てて
早稲田大学 鈴木 陽子

- 816 情緒障害学級教室内所要室の評価について
——プレイルームの場合——

熊本工業大学 西島 衛治

- 817 障害児の概念活動
釧路短期大学 中島 常安

<質疑応答・討論の概要>

山根 (809) に対して、竹花 (筑波大学) から、新近性効果の関連で結果はどうか、T検定は適切かと質問があり、山根は新近性効果については前回報告 (82) で明らかであり、PLAによりマッチングした対象間の比較なのでT検定は可能と考えると答えた。

長島 (810) に対して、鈴木から、自閉的傾向の規定について質問があり、M. Rutter L. Wing らの基準によって養護学校担任等教師集団により抽出された対象のうち、検査者も自閉的傾向と認めた児童であり、自閉症候群ととらえていると答えた。

近藤 (811) に対して、上野 (東京学芸大) から、IQによる分析結果について質問があり、IQでのコントロールのための被験者が得られず、機能水準の高い幼児期からの発達良好で普通学級在籍児を被験児としたと答えた。久田 (国立特殊教育) から、言語刺激と絵カード刺激の比較は不適切と質問され、言語刺激で反応できな

かった対象に絵カードの援助効果をみたと答えた。竹花から、先の2刺激間の比較の検定はU検定よりも X^2 検定の方が適切ではないか、色次元と形次元の正答率の差はなにによるかと質問があり、色の方が形よりも早期に習得されるという発達の要因があり、被験者の反応には大きなばらつきがあるなど今後検討を要すると答えた。

打越 (812) に対して、飯田 (柳城女子短大) から発声のための Skill について、長島から環境変化による不適応行動への対応について質問があり、治療室になれることを目標に奇声等は無視し適切な行動はほめて強化し、興奮の低下時に訓練したと答えた。近藤から発話しやすい語について、訓練語いの導入順序について質問があり、母音から口唇破裂音へ、要求表現する必要場面での動作からそれに併う発声へ、さらに言語のみへと進んだと答えた。山根から、発語訓練に入る時点での言語理解・非言語コミュニケーションレベルについて質問があり、奇声のみであり、生活場面での指示理解可能で、絵カード弁別において60~70%の達成率であったと答えた。

千田・土谷 (813・814) に対して上野から、脳障害型遅滞児と M. B. D. の判別の困難性が指摘され、心理検査結果について質問され、2度も母親の間接的拒否にあり実施する必要性を認めなかったと答えた。山根から被験児の視覚的弁別力と文字習得成立の理由について質問があり、葉書大の写真の細部を比較し、ノート大のバズルボックス組立ができる程度の力がある、事象系と行動系と信号系の相互の分化・対応を図り、受信状況と発信状況を区分する等の仮説にたつと答えた。

鈴木 (815) に対して、上野から、教育指導の観点から M. B. D. より L. D. の方が適切ではないか、損傷の用語はダメージを与えるので使用しないという歴史をふまえるべきではと質問があり、M. B. D. の方が概念的に明確だと考えており、文献検索でも両者がみられると答えた。

西島 (816) に対し、上野はバリマックス回転の分析過程について記すべきではと質問し、回転後が適切であると考えたと答えた。

中島 (817) に対し、竹花は CA による区分など条件統制について質問し、必要性は認めるが十分な被験児を得られなかったと答えた。上野は、鈴木ビネーによる統制は適切かと質問し、鈴木ビネーの信頼性は別に検討する必要あるが、健常児では概念能力と鈴木ビネーの IQはこのような落差はないと答えた。

(長島瑞穂)